

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

奈良市田原の岡井禓郎さんに久しぶりにお会いした。田原地区自治連合会や伝統芸能保存会の会長などを務め、その後も地元の歴史や民俗文化を生かしたさまざまな活動を行い、最近は自家の「叩き番茶」を普及しようとを考えている。

岡井家は中之庄で造り酒屋を営んでいたが、祖父の代から運送業を始めた。当時の看板や激しい労働でつぎはぎだらけになった厚手の木綿の法被などが残されているが、「人夫のアミダ」というものが残っている。

田原はさまざまな物資運搬の中継地点であった。都祁方面で、寒冷な気候を利用してかつて盛んに作られていた凍り豆腐や柴やワルキ(割木)などが奈良方面へ運ばれ、反対に小倉(旧都祁村)や波多野(山添村)方面へ、雑貨・肥料・農

具・日用品などが運ばれていた。こうした荷は、牛か馬に一本楕の荷車をつけて馬方が曳き、田原地区内の荷は、台八車を人が肩で曳いていた。馬方が集まる岡井家に、ロープを束ねたクジ(籤)が用意されていた。

親方が紐の口をつかんで下の方を少したるませ、馬方に一本ずつ引かせる。一番長い紐をとった者が軽くて近い荷物を運ぶことになっていた。岡井氏の祖母は、このクジのことを「人夫のアミダ」と呼んでいたという。

アミダといえば、かつて職場や学校でも行われていた。紙に参加者の数だけの縦線を引き、適宜梯子状に横線も加えて、このクジで役割を決めた。



右「人夫のアミダ」のクジを持つ岡井さん(雲助のクジ
(十返舎一九筆『東海道膝栗毛画帖』)



人夫のアミダクジ

柳田国男(1875~1962)は、郷里の兵庫県神東郡田原村辻川の街道筋で「成るべく遠望のきく場所に、所謂人力車の立場を設け、そこには里程表と籤を引く麻繩の束を引掛けて、仕事着に足ごしらえを

した。これは紙に書いた紐の長さの長短で決めるものだった。

アミダのクジは、室町時代には「阿弥陀の光」と呼ばれて、公家の間でも度々行われていた。その名の由来は、阿弥陀仏の長短のある線状の光背の様子からといわれる。公家達が行ったアミダクジが具体的にどのようなものだったかは不明であるが、長短の紐や紙縞(こより)や藁(わら)を用いることで何かを決めることができる。

十返舎一九筆の『東海道膝栗毛画帖』には、箱根で雲助達がクジを引いている光景が描かれており、箱根旧街道資料館には、実際に雲助達が仕事を道筋に使ったとされるクジ繩が残されている。道筋に使ったとされるクジ繩が残されており、箱根旧街道資料館には、実際に雲助達が仕事を決めていた。これが改変されて、今日の紙に描いた梯子状のアミダクジに変化していったのだろう。

(奈良民俗文化研究所代表)
次回は17日